今月号では、９月から各行政区ごとで行われている人権学習会について、各地での取り組み状況をお知らせします。

意見を述べ合える喜び

つい最近、私は新聞を読んでいて気になる表記に遭遇した。普通なら「障害者」と書くところを「障がい者」とあったのである。一般的には「障害者」だが、そこをあえて「障がい者」と書くからには筆者に何らかの（いや、確たる）意図があるのは確かだろう。

私の推測では、「害」は害悪、害毒、妨害などマイナスイメージを想起する文字なのでそれを避けて仮名書きにし、人権に配慮したのではないかと思うのだが、どうか。これが現役のときだったらすぐにそのことを聞くことも、それについて議論することもできたのだろうが、引退した今、そんな人は近くにいない。

唯一、そんな場・機会があるとするなら旧国東町で行っていた「地域じんけん学習会」や、「富来地区差別をなくす町民の集い」だろう。前者は毎年秋に地区ごとで集会を持ち、テーマ（昨年は高齢者問題）に沿って参加者がそれぞれ意見を述べあう、後者は12月に講師を招いて講演を聴き質疑に答える、そんな催しだ。

もし、そんな集会が開かれるようなときには、私は積極的に出掛け、日頃疑問に思っていることを聞き、また、矛盾点を指摘したり異論を述べたりして己を高めるべく努力している。孔子は「思ひて学ばざれば則ち殆（あやふ）し」（『論語』・為政篇）と言っているが、それはまさにこのことであり、それを実践してこそ真に自分のものになるのである。

今回、合併で新市になっても「地域じんけん学習会」が継続され、地区民と「高齢者に関わる人権問題」について意見を述べ合うことができた喜びは大きいものがある。

国東町堅来　安達　郁雄

▲10月25日㈬　見地公民館（国東町）

介護をする立場・される立場

「人権・同和問題について正しい理解をもち、相互に尊重しあう人づくり」をめざし、昨年度に続きワークショップを中心にした学習会を開きました。過疎・高齢化が進む町内で、身近な問題であり関心の高い「親の介護は、だれが？」という「高齢者・女性問題」に焦点を当てて話し合いました。

〈会場の雰囲気、参加者の声から〉

●「親の介護は男女平等であたれ、という意見がありますが、介護される立場からいえば慣れている女性の方が安心で良い介護になると思うのですが。」の課題を提示すると

★どの会場でも、過去にまた現在においても親の介護にあたられた人も多く、その実体験談を語られました。他の参加者は自分自身の問題として受け止め、積極的な話し合いとなりました。

■「高齢化・核家族化が進み、福祉サービスが充実しつつあるが、基本は家族同士が十分に話し合うことが一番大切なのではなかろうか。」という共通の声。

■「介護される側の気持ちを大事にしたい、また、そう願いたい。」という、自分に置き換えての男性発言。

■「身内の世話にならず、福祉サービスを受ける。」と、自分の近未来を見据えた女性の意見等、自分の考えを語り、他人の言葉に耳を傾けるワークショップでした。

▲10月27日㈮　高齢者活動促進施設ふれあい（国見町向田）